

ヘンダーソンの基本的欲求の概念規定

—14番目の基本的欲求「正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる」について—

西 脇 友 子¹⁾

Henderson's Conceptualization of Fundamental Human Needs

—The 14th fundamental need:

“to learn, discover, or satisfy the curiosity that leads to normal development and health”—

NISHIWAKI Tomoko

抄 録

ヴァージニア・ヘンダーソンの14番目の基本的欲求「正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる。(Learn, discover, or satisfy the curiosity that leads to 'normal' development in health)」について、看護対象論の視点で概念規定を試みた。14番目の基本的欲求は、「normal' development in health」になるように「人間が自ら主体的にワクワクしながら“学ぶ”欲求」と規定した。“normal”につけられたクォーテーションマークは、悪事を成し遂げる意味を含まず、あくまでも「日々よりよい自分になり、より健康になる」ように学ぶという、学ぶ目的を強調したものであろう。

1番～13番の基本的欲求は、「学びの要素」である。ゆえに、主体的な学びの欲求は、他のすべての欲求と関連し、よりよい自分になり、より健康になるという終生終わることのない人間としての成長発達の欲求である。

健康維持期における14番目の欲求は、病気にならないために学習をする欲求というより、今の生活をより楽しく、より健康な自分になりたいという自己実現の欲求である。

健康逸脱期における14番目の欲求は、生命と安寧を維持するために病者役割を遂行しより早く健康を回復するために学習する欲求である。

健康回復期における14番目の欲求は、健康に対する価値観を見直し、健康逸脱の原因となった可能性のある生活習慣を発見し、心身の障害を持ちながらもより健康になるような新たな生活習慣や健康観を再構築するために学習する欲求である。

キーワード：ヘンダーソンの14番目の基本的欲求、学び、看護目的論、概念規定

1) 健康科学大学 看護学部設立準備室

はじめに

ヴァージニア・ヘンダーソンは、1960年に『看護の基本となるもの』を出版した看護理論家である。著書の中で、看護とは何かを定義し、看護独自の機能を明らかにすることで、ヘルスケアチームの一員としての看護師の位置づけを明確に提示した。

ヘンダーソンが定義した看護は次のようである。「看護婦の独自の機能は、病人であれ健康人であれ各人が、健康あるいは健康の回復（あるいは平和な死）に資するような行動をすることを援助することである。その人が必要なだけの体力と意思力と知識を持っていれば、これらの行動は他者の援助を得なくても可能であろう。この援助は、その人ができるだけ早く自立できるように仕向けるやり方で行う。」¹⁾そして、健康あるいは健康の回復（あるいは平和な死）に資する行動を「人間の基本的欲求」とし、次の14の基本的欲求を明示した。

- ①正常に呼吸する。
- ②適切に飲食する。
- ③身体の老廃物を排泄する。
- ④移動する、好ましい肢位を保持する。
- ⑤眠る、休息する。
- ⑥適切な衣服を選び、着たり脱いだりする。
- ⑦衣類の調節と環境の調節により体温を正常範囲に保持する。
- ⑧身体を清潔に保ち、身だしなみを整え、皮膚を保護する。
- ⑨環境の危険因子を避け、また、他人を傷害しない。
- ⑩他者とコミュニケーションをもち、情動、ニード、恐怖、意見などを表出する。
- ⑪自分の信仰に従って礼拝する。
- ⑫達成感のあるような仕事をする。
- ⑬遊び、あるいは種々のレクリエーションに参加する。
- ⑭正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる。

ヘンダーソンがあげた14の基本的欲求は、看護対象論そのものである。そして看護の対象者である人間を「人間は14の基本的欲求を持ち、その人が必要なだけの体力と意思力と知識を持っていれば基本的欲求を自立して充足することができる。」と定義した。今回は14番目の基本的欲求「正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる。(Learn, discover, or satisfy the curiosity that leads to 'normal' development in health)」について、看護対象論の視点で概念規定を試みた。

1. 概念的規定

1) 言語から

ヴァージニア・ヘンダーソンが人間の基本的欲求の14番目に挙げた「学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる (Learn, discover, or satisfy the curiosity)」とはどのような意味があるのだろうか。学習というと学校で先生から強制的に課題を与えられ“学ばされる”という主体性を欠くイメージを伴う。しかし、人間が生命体として生き、社会生活を営み、終生成長発達を遂げるのに不可欠な欲求である基本的欲求の中に挙げられている「学習」はいよいよ学ぶとか誰かに強制的に学ばされるのではなく、人間は自ら主体的にワクワクしながら“学ぶ”欲求を持つという人間観に立っているのではないだろうか。

Learn を辞書²⁾で引くと学ぶ、習い覚える、身につけるとある。類語の Study という語の意味は努力して学ぶ過程を表し learn の語に含まれる身に付いたかどうかは意識していない。Learn はただ知識や技術を知ったり理解したりするだけではなく身につけること、つまり「新しい自分になる」ことを内在している。新しい自分になるには、今まで身につけた概念や技能を壊すか修正して新しい概念や技能を身につけなければならない。あるいは、今まで全く自分にはなかった概念や技能を受け入れなければならない。新しい自分になる過程つまり学習 (learn) の過程では、新しいこと・未知なるものに対し好奇心 (curiosity) を持ち、満たすために探索し、その結果として何かを発見 (discover) するだろう。Curiosity の動詞の Curious は辞書では物を知りたがるとある。知識や情報や技術等の不足を感じそれを埋めるために知りたがる、知りたがるのは自分自身で他人から「知りたがりなさい」と強制されるような意味は持たない。あくまでも主体的に自分からわき起こる感情であろう。この好奇心の動詞となっている語の satisfy は、辞書²⁾では「欲望・希望・必要などを十分に満たす；単に満足するだけでなく積極的な楽しみを感じずる。」と説明されている。自分自身が感じた好奇心は自分で楽しみを感じながら満たして行く欲求なのである。Discover は辞書²⁾では発見する、気づくとある。除くや剥ぐという意味の dis と覆うという意味の cover が結びついている語である。覆いを除くのは自分自身であろう。好奇心は学習の原動力となり、発見は学習の結果ともいえる。ヘンダーソンが learn だけでなく discover と satisfy curiosity を入れたのは、learn に自ら主体的にワクワクしながら“学ぶ”という意味を持たせたかったのではないかと思う。

主体的に学ぶ欲求の目的は、that 以下「正常な発達と健康を導く」である。curiosity に定冠詞 the がついており、好奇心の向かう先は正常な発達と健康だということを示している。“normal”につけられたクォーテーションマークは、主体的な学びの目的が麻薬の快楽を求めるために学ぶというような悪事を成し遂げる意味を含まず、あくまでも「日々よりよい自分になり、より健康になる」ように学ぶという、学ぶ目的を強調したものであろう。佐伯は“学ぶ”という言葉について、学びは本人が主体的に自分から学

ほうとする営みで、少なくとも学び手にとって何らかの意味で「よくなる」ことが意図されていると述べている³⁾。14番目の基本的欲求は、「normal' development in health」になるように「人間の自ら主体的にワクワクしながら“学ぶ”欲求」と規定できる。

2) ヘンダーソンの看護論が生まれた時代的背景から

ヘンダーソンが誕生した頃の1900年の死因の第1位から第3位は、インフルエンザと肺炎、結核、胃腸感染症といった感染性の疾患であった。社会環境や生活環境の改善、抗生剤の開発等の医療の進歩によりこういった感染性の疾患は、1930年頃から急激に減少し、1950年の死因の第1位から第3位は心疾患、悪性新生物、脳血管疾患という生活習慣病に移行した⁴⁾。貧困や不衛生などの環境衛生、伝染性疾患等の公衆衛生の問題は、公衆衛生看護の必要性を生み、19世紀後半には訪問看護婦や地区看護婦が公衆衛生看護活動として妊産婦の世話、乳児福祉、結核患者の看護、学校看護等で看護の対象者に教育的な働きかけを行い成果を上げた⁵⁾。訪問看護婦として仕事をしていたヘンダーソンも日々教育的な看護を実践し、正常な発達と健康を導くための学習の意味を身をもって感じていたと思われる。それは、「看護婦は教えざるをえないのである。教えることは看護婦のすることすべてに本来含まれているのである。」⁶⁾という言葉に示されている。

また、20世紀前半の医学と社会環境は急速に発展した。ヘンダーソンが「患っている病気の予防法や治療法についてすでに発見されていることを知らず、実行できないために病気になる。患者の回復、病気の進行阻止はひとえに再教育にかかっている。」⁷⁾と述べているように、急速に進歩した医学の知識や技術等は、インターネット等の情報取得手段がなかった時代背景を考えると、住民の多くは新たな予防法や治療法の知識を得ることは困難であり、看護師にとって患者教育は重要な仕事となった。このように、公衆衛生看護の成果と医学的・社会的変遷による看護機能の変化が、“正常”な発達および健康を導くための基本的欲求に「学習すること」をあげた背景の一つであったと思われる。

さらに、新教育運動も影響を与えたのではないだろうか。「学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる (Learn, discover, or satisfy the curiosity)」という基本的欲求の表現は、学習する者の主体性を強調し、学ぶことの本来のあり方を示している。19世紀末から20世紀初頭に「教材」と「聞く」という教師中心の画一化した教育ではなく、児童中心の「新教育」運動が起きた⁸⁾。アメリカにおける新教育運動の理論的指導者であるデューイは、子どもの本性に内在する法則に教授の法則があると論じ、「子どもの興味を抑圧することは子どもを大人に置き換えることで、子どもの知的な好奇心と感性や創造性を押し殺してしまう。」⁹⁾と述べている。このような新教育運動の学びの主体は学び手にあるという考えは、14番目の基本的欲求に内在している。

3) 基本的看護の定義から

14の基本的欲求に対する看護には、14の看護が対応しており、基本的看護と呼ばれて

いる。基本的欲求の14番目の「“正常”な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる」に対する基本的看護は、「患者が学習するのを助ける（Helping Patient Learn）」となっている。なぜ学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させるのを助けるのではないのだろうか。

基本的看護は、基本的欲求を満たすために必要な体力と意思力と知識が欠如し基本的欲求が未充足になった人に実施される。「主体的に学ぶ欲求」を充足する体力と意思力と知識が欠如している場合、「発見をし、あるいは好奇心を満足させる」というエネルギーギッシュな主体性のある学びは難しいのではないだろうか。また、健康の逸脱期や回復期においては、学習者本人が学びたいと思わなくても、学習しなければならない時もある。そのような理由で本人の意思が関与しない学習（Learn）だけを用いているのだと思う。

また、基本的看護には学習の目的である「“正常”な発達および健康を導く」は表現されていない。「“正常”な発達および健康を導く」という「学習の目的」は、1～13の基本的看護を実施することで達成可能となる。なぜならば、14番目の基本的欲求は、金子が¹⁰⁾述べたように1～13の基本的欲求の総括的欲求という意味を持つからである。あえて何のために学習を助けるかを明記する必要はないのである。さらに、ヘンダーソンの「教えることは看護婦のすることすべてに本来含まれているのである。」という言葉は、1～13の基本的看護には学習を助ける行為が内在していることを示している。

2. 基本的欲求の順序性からの規定

ヘンダーソンの基本的欲求は、マズローのニード論と対比して論じられている。マズローは、人間の欲求（ニード）を階層でできたピラミッドとみなし、下から、「Ⅰ生理的欲求、Ⅱ安全の欲求、Ⅲ所属と愛情の欲求、Ⅳ自尊の欲求、Ⅴ自己実現の欲求」としている。ヘンダーソンの14の基本的欲求をマズローの欲求階層に当てはめると、「①正常な呼吸、②飲食、③排泄、④移動と体位の保持、⑤睡眠と休息、⑥脱衣と着衣、⑦体温の保持、⑧清潔な皮膚」は、Ⅰ生理的欲求にあたり、「⑨危険回避」はⅡ安全の欲求、「⑩コミュニケーション、⑪宗教」は、Ⅲ所属と愛情の欲求、「⑫仕事」は、Ⅳ自尊の欲求、「⑬レクリエーション、⑭学習」は、Ⅴ自己実現の欲求となる。土台である生理的欲求が満たされないとその上の欲求は後回しにされ、下の欲求がある程度満たされて、はじめてその上の欲求を充足することができるようになると説明できる。

しかし、ヘンダーソンはこのような欲求の階層を否定し「他人に認められたい、また愛し愛されたいという気持ち、これはある場合、ある人々においては生存の欲求より強い。芸術家が、自分の信ずる真理あるいは美をめぐる内なる命令に従って、人々の称賛をものとしなかないかのように何年も仕事に打ち込む様も同じである。人間には同じ欲求があると知ることは重要であるが、それらの欲求がふたつとして同じもののない無限に多様な生活様式によって満たされていることも知らなければならない。」と述べている。また、基本的欲求について「看護婦は衣食住に対する人間の免れ得ない欲望を念頭にお

かなければならない。愛と称賛、社会生活における自己の有用性と相互依存性、に対する欲望も同じように無視できない。」としている。

つまり、基本的欲求には、「人間が生きるために必要な欲求」、「社会生活を営むための欲求」、「人々の称賛をものともせずあることに打ち込む欲求＝自己実現の欲求」があり、階層はないとした。これらの基本的欲求を「第1面：人間が生きるために必要な欲求」、「第2面：社会生活を営むための欲求」、「第3面：自己実現の欲求」として、14番目の「“正常”な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる」欲求を規定してみる。

人間が生きるために必要な欲求である第1面に位置づく、呼吸、飲食、排泄、移動、睡眠と休息の欲求は、文化的に営まれている日常的な行動を学ぶことからスタートし、習慣になっていく。そこでの学びは主体的に意識的に学ぶというよりは文化の継承としての“まね”や受身的無意識的に行為として身につくことが多いのではないだろうか。主体的に意識的に学ばなければならないのは健康逸脱期や回復期など正常な発達や健康が脅かされた時である。これについては後述する。

社会生活を営むために必要な欲求である第2面の衣類の選択と着脱、体温の調整、皮膚の清潔保持、危険回避、コミュニケーションの欲求は、第1面の欲求よりも「意識的な学び」となり、人とのかかわりの中で「主体的な学び」が生まれていく。社会生活を営むための欲求を満たしていくことは、その人らしく生きていくために必要な能力の獲得過程ともいえる。このように第2面の欲求は、自我の形成過程と関連している。自我の形成過程は、社会生活を営む過程で確立され、主体的に学ぶには、自我が確立してはならない。主体的な学びは自分と問答し、重要他者と問答し、現実の文化・社会と問答する必要がある。

第3面の自己実現の欲求には、宗教、仕事、遊びレクリエーションの欲求が位地づく。これらの欲求はその人らしさを規定する欲求であり、自分の可能性を引き出し拡大していく（成長発達）欲求である。第3面に属する欲求を満たすには「意識的で主体的な学び」なしに達成できない。14番目の「日々よりよい自分、より健康な自分を求めて主体的に学ぶ欲求」は、人を人として規定する欲求であり、その人をその人として規定する欲求でもある。つまり、1～13の基本的欲求は、「正常な発達および健康に導く学びの要素」であり、主体的な学びの欲求は他のすべての欲求と関連し、よりよい自分になり、より健康になるという終生終わることのない人間としての成長発達の欲求であると規定できる。

3. 健康レベルにおける規定

ヘンダーソン看護論における看護の必要性は、対象者の基本的欲求が充足されているか未充足か査定することによって明らかになる。ヘンダーソンは、この査定に当たって考慮しなければならないこととして、「基本的欲求に影響を与える常在条件：その人の年齢、文化的背景、情緒のバランス、また身体的、知的な能力」と「基本的欲求を変容

させる病理的状态」を挙げている。ここでは、健康レベルから14番目の基本的欲求「正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる。」を規定する。

1) 健康維持期

健康維持期において「正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる」欲求とは、病気にならないために学習をする欲求というより、今の生活をより楽しく、より健康な自分になりたいという自己実現の欲求である。

今の時代はインターネットの普及により健康に関する情報やカルチャーセンター等の学習の場、ボランティア団体等への参加に対する情報は望めば簡単に入手できる。動機があり時間的・経済的・物理的な条件が満たされれば、生活を楽しみ健康を向上させるための学習や活動への参加の機会が容易である。さらに、インターネットがなくてもテレビのコマーシャルや町の薬局、スーパー等でも健康を売り物にした品物であふれている。このように健康に関する情報は氾濫しすぎており、何が正しいのか自分に合っているのか吟味できる能力がないと健康が脅かされ、犯罪に巻き込まれる危険性もある。例えば国内外の健康食品や化粧品、医薬品を通信販売で購入し健康を害したり、健康を売り物にした霊感商法にまきこまれたりする等である。

健康維持期に行われる健康診断は、病気の早期発見早期治療の目的もあるが、より健康になるために今までの生活を見直し、より健康になるためや健康逸脱に至らない生活を学習する健康学習の機会である。また、あふれている健康に関する情報を吟味する能力を磨く機会にもなるだろう。

2) 健康逸脱期

健康逸脱期における「正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる」欲求とは、生命と安寧を維持するために病者役割を遂行しより早く健康を回復するために学習する欲求である。

健康逸脱期は、生理的欲求と安全の欲求が第一義となるが、自分自身の体に何が起きているかがわかり、体と心の反応に注目し、健康回復に向けてどのような行動が効果的かを学習することは生理的欲求と安全の欲求を満たすためになくはない欲求である。上気道感染の症状や下痢など今まで経験したことがある健康逸脱では、体に何が起きているかだいたいわかるし、各家庭独自の対処方や、個人々が小児期から身につけてきた対処行動で健康回復を図ることが可能かもしれない。病院に行くとか、学校や仕事を休むとか、消化の良い食べ物を食べるとか等々である。しかし、今まで無意識的、意識的に身に付けた健康逸脱における対処方法では対処できない場合、意識的に今までの対処方法を変更したり、新しい対処行動を学んだりしなければならない。例えば今まで一度も経験したことがない症状に対処する場合や悪性疾患等で手術を受ける場合、糖尿病等で生活習慣を変更しなければならない場合である。今まで経験したことがない健康

逸脱を乗り越り健康回復に向かうように学習をするには医療従事者の支援を必要とする場合が多い。体に何が起きているか自分ではわからないことが多いし、治療に対する情報の質や量にも問題があるだろう。自分や家族だけでは生命と安寧を維持するために病者役割を遂行し、より早く健康逸脱を脱するために学習する欲求を満たすことは難しい。

3) 健康回復期

健康回復期における「正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる」欲求とは、健康に対する価値観を見直し、健康逸脱の原因となった可能性のある生活習慣を発見し、心身の障害を持ちながらもより健康になるような新たな生活習慣や健康観を再構築するために学習する欲求である。

健康回復期は生命と安寧が維持されている時期であり、「正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる」欲求はこの期においてもっとも重要な欲求になる。人間が生きるために必要な欲求である第1階層に位置づけられる、呼吸、飲食、排泄、移動、睡眠と休息の欲求は、無意識的に生活習慣になっている場合が多い。健康回復期では、生活習慣を意識化し健康逸脱を起こした要因を探り、正常な発達と健康を導くような具体策を決定し実行可能な生活習慣を再構築するための学習をする。再構築だけでなく健康障害によって新しく学ばなければならない生活習慣もある。心不全の人は呼吸と移動、睡眠について病状をコントロールするために必要な知識と技術を学ぶだろうし、糖尿病の人は飲食と移動について新たな知識と技術を獲得しなければならない。片麻痺や視力を失った場合は生活全般にわたって新しい生活を学習しなければならない。

社会生活を営むために必要な欲求である第2層の衣類の選択と着脱、体温の調整、皮膚の清潔保持、危険回避、コミュニケーションの欲求においても、病状のコントロールとより健康になるために、今までの生活を見直し再構築と新たな学習をしていく。特に危険回避では、どのような症状になったら悪化しているのか、受診しなければならないのか、薬の副作用について学ばなければならない。

第3階層の信念に基づく自己実現、仕事、遊びレクリエーションの欲求は、健康逸脱によって一時的に満たすことが困難になっていた欲求もあるだろう。特に仕事の欲求はそれ自体が健康逸脱の原因になっていたりもする。仕事と正常な発達および健康とのバランスを見直し、自己の価値観を見直す機会となる。

健康回復期は、健康逸脱を機に正常な発達および健康のレベルを向上し、自分の可能性を拡大できる可能性のある期といえる。このような学習を可能にするには家族や医療従事者の支援が欠かせない。主体的な学習ができるような支援が必須となる。

4) 安らかな死

安らかな死における「正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる」欲求とは、希望を絶やすことなく抱き続ける欲求ではないだ

ろうか。

疾患や老衰などで死を確実に予想している人でも生が終わるまで生きている。人間における基本的欲求は生きている人すべてが持っている欲求である。生が終わるまで学ぶことができるということである。人が主体的に学ぶのは、学んだ先に新しい自分をみるからだろう。希望の世界を生きていると言い換えられるかもしれない。肉体が衰弱していても、希望の世界に生きることはできる。「～が食べたい」「～が読みたい」など些細な希望を見だし、どうしたらかなえられるかやってみる人もいれば、「旅行したい」「山に登りたい」など壮大な希望を持つ人もいる。死後の世界に希望を見いだす人もあるだろうし、家族に希望を託す人もあるだろう。希望を持っている限り、学習し発見をし、好奇心を満足させる欲求を満たすことは不可能ではない。

愛と称賛が得られ、社会的自己有用性を感じることができ、相互に認め合えるような人間関係の中にいることができれば、生が終わるそのときまで人は希望を見だし抱き続けることができる。

結 論

ヴァージニア・ヘンダーソンの14番目の基本的欲求「正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる。(Learn, discover, or satisfy the curiosity that leads to 'normal' development in health)」について、看護対象論の視点で概念規定を試みた。

14番目の基本的欲求は、「'normal' development in health」になるように「人間が自ら主体的にワクワクしながら“学ぶ”欲求」であると規定した。“normal”につけられたクォーテーションマークは、主体的な学びの目的が悪事を成し遂げる意味を含まず、あくまでも「日々よりよい自分になり、より健康になる」ように学ぶという、学ぶ目的を強調したものであろう。

1番～13番の基本的欲求は、「正常な発達および健康に導く学びの要素」である。ゆえに、主体的な学びの欲求は、他のすべての欲求と関連し、よりよい自分になり、より健康になるという終生終わることのない人間としての成長発達の欲求である。

健康維持期において「正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる」欲求とは、病気にならないために学習をする欲求というより、今の生活をより楽しく、より健康な自分になりたいという自己実現の欲求である。

健康逸脱期における「正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる」欲求とは、生命と安寧を維持するために病者役割を遂行しより早く健康を回復するために学習する欲求である。

健康回復期における「正常な発達および健康を導くような学習をし、発見をし、あるいは好奇心を満足させる」欲求とは、健康に対する価値観を見直し、健康逸脱の原因となった可能性のある生活習慣を発見し、心身の障害を持ちながらもより健康になるような新たな生活習慣や健康観を再構築するために学習する欲求である。

引用文献

- 1) Virginia Henderson: 湯横ます・小玉香津子訳: 看護の基本となるもの, 日本看護協会出版会, p 11, 1995.
- 2) 新英和中辞典, 研究社, p1078, 1970.
- 3) 新英和中辞典, 研究社, p1600, 1970.
- 4) 新英和中辞典, 研究社, p560, 1970.
- 5) 佐伯 胖: 学ぶということの意味, 岩波書店, pp 3-4, 1995.
- 6) David S.Jones : The Burden of Disease and the Changing Task of Medicin, N ENGL J MED 366; 25 JUNE 21, 2012, p2336.
- 7) 前掲 1) p71, p74.
- 8) 前掲 1) p70.
- 9) 乙訓 稔: ジョン・デューイの児童観と教育理論, 実践女子大学 生活科学部紀要第43号, p37, 2006.
- 10) 勝又正直: はじめての看護理論, 日総研, pp16-17, 1995.
- 11) 前掲 1) p18.
- 12) 前掲 1) p17.

Abstract

The current study attempted to conceptualize, from the perspective of nursing, Virginia Henderson's 14th fundamental human need, : "learn, discover, or satisfy the curiosity that leads to normal development and health." This need is defined as the "need to 'learn' with self-directed enthusiasm as a person" in order to have "normal development in health." "Normal" is placed in quotation marks to emphasize the learning objective, which is to learn "how to be more healthy every day in one's own manner" without implying any misconduct.

Fundamental needs 1 to 13 are "learning factors." Therefore, the need for self-directed learning is related to all other needs, and is the need to grow and develop as a person, to be a better, healthier individual for life.

During health maintenance, the 14th need is the need for self-fulfillment, to enjoy life more and to be healthier, rather than the need to learn how to avoid falling ill.

During periods of health deviation, the 14th need is the need to learn how to restore health more quickly carrying out the role of the patient to maintain life and tranquility.

During periods of health restoration, the 14th need is the need to review one's sense of values about health, to discover possible habits that caused the health deviation, and to learn how to rebuild a new life and health outlook in order to lead a healthier life even with physical and mental obstacles.

Key words : Henderson's 14th fundamental need

Learning

Nursing perspective

Conceptualization